

宇治に築かれた西方浄土への憧れ ～平等院庭園～

杉本 宏

(宇治市歴史まちづくり推進課主幹)

1. 平等院創建

平安時代の宇治は、平安京の南郊に開けた別業の地であった。平等院の前身は、平安前期に造営された源融の宇治別業に溯り、平安中期になってこの宇治別業が藤原道長に買得され、さらに長子頼通に伝領されたのち、永承7年(1052)に寺院に改造され平等院となっている。時あたかも末法初年であった。創建時の仏堂は別業寝殿を改修した本堂であり、鳳凰堂は翌年に建立されている。この後、一門によって造営が進められ、頼通が薨じた1074年までには約8haの境内に多くの堂塔が建ち並ぶこととなった。主要堂塔には、先の本堂・鳳凰堂のほか、法華堂・多宝塔・五大堂・不動堂・護摩堂・経蔵・鐘楼・北大門・西大門などが記録に残り、通常の僧房以外にも南泉房・成真房など規模の大きな房院も境内周囲に展開していた。

平等院は伽藍配置上のいくつかの特徴を持っている。一つは寺域東限が宇治川西岸となり、ここに築地塀などの遮蔽施設を持たないこと。二つに各堂宇が東面を基本とすること。三つに伽藍中軸線が見出せないことである。浄土庭園を持つ寺院(浄土教寺院)の嚆矢となる藤原道長創建の法成寺や、白河天皇創建の法勝寺のように、四周を築地塀が取り巻き、南門から延びる南北軸上に南面堂と池を配置し、園池をコ字形に堂が囲む様子とは、およそ違うこととなる。また鳳凰堂の建築型式は鳥羽の勝光明院や平泉の無量光院などに引き継がれ、その後の浄土教寺院の展開に大きな影響を与えることとなった。

2. 平等院庭園

平等院伽藍の中核施設が鳳凰堂であることは、記録の上でも伽藍配置の上でも明らかである。鳳凰堂は定朝作文六阿弥陀如来坐像を本尊とする東面堂で、建築的には仏堂である中堂と、その南・北・西にデザイン化された廊を付設し、阿弥陀仏の宮殿宝楼阁を模した阿弥陀堂建築である。鳳凰堂は池の中島上に建てられており、周囲に庭園が展開する。平等院庭園とは、鳳凰堂を中心に作庭された仏堂庭園であり、極楽浄土の有り様の再現を目指した浄土庭園ということになる。

庭園の中核となる阿字池は、現在は主に鳳凰堂東面と北面に水面を広げるが、かつては背後となる西方にも、河岸段丘に沿って大きく広がっていたことが分かっている。また現在、鳳凰堂正面側は堤防の木立で東への眺望が阻害されているが、本来は庭園と宇治川岸とは直結しており、景観を広く東に開いていた。阿字池は別業時代の園池を踏襲したもので、鳳凰堂の建立にあたっては、西側河岸段丘面を削って池面を広げつつ中島を掘り残している。池水は河岸段丘面と池中からの湧水でまかなわれており、宇治川へ排水していたものと考えられる。河岸段丘崖となる池南岸を除く他の部分は、緩傾斜の汀となり基本的に拳大の河川礫を用いた洲浜が造成され要所に景石が配置されているなど、あしらいは基本的に同時代の寝殿造庭園と同じである。

鳳凰堂前面である池東岸は、当初は堂正面の南より小石敷きの細い出島があり、宇治川との間も一面の小石敷き庭園となっていた。しかし頼通薨去後

ほどなく、この辺りは池の埋め立てと庭園面の嵩上げが行われ、鳳凰堂真対岸に鳳凰堂の観覧施設である小御所が建てられている。続く12世紀初頭には鳳凰堂の大改修が行われ、柱が池から立ち上がる翼廊型式から総壇上積基壇に変わり、屋根も本瓦葺きとなった。当初の屋根は、平泉中尊寺金色堂のような木瓦葺きが推定されている。

3. 極楽世界の儀を移す

1061年の多宝塔建立記事の中には「平等院は邸宅を改め寺院とし、阿弥陀如来の像を造って極楽世界の儀を移した」と述べられている。また都では「極楽いぶかしくば宇治の御寺をうやまへ」という謡が流行ったという。平安当時、平等院は都人に現世の極楽浄土として認識されていたと見てよいだろう。

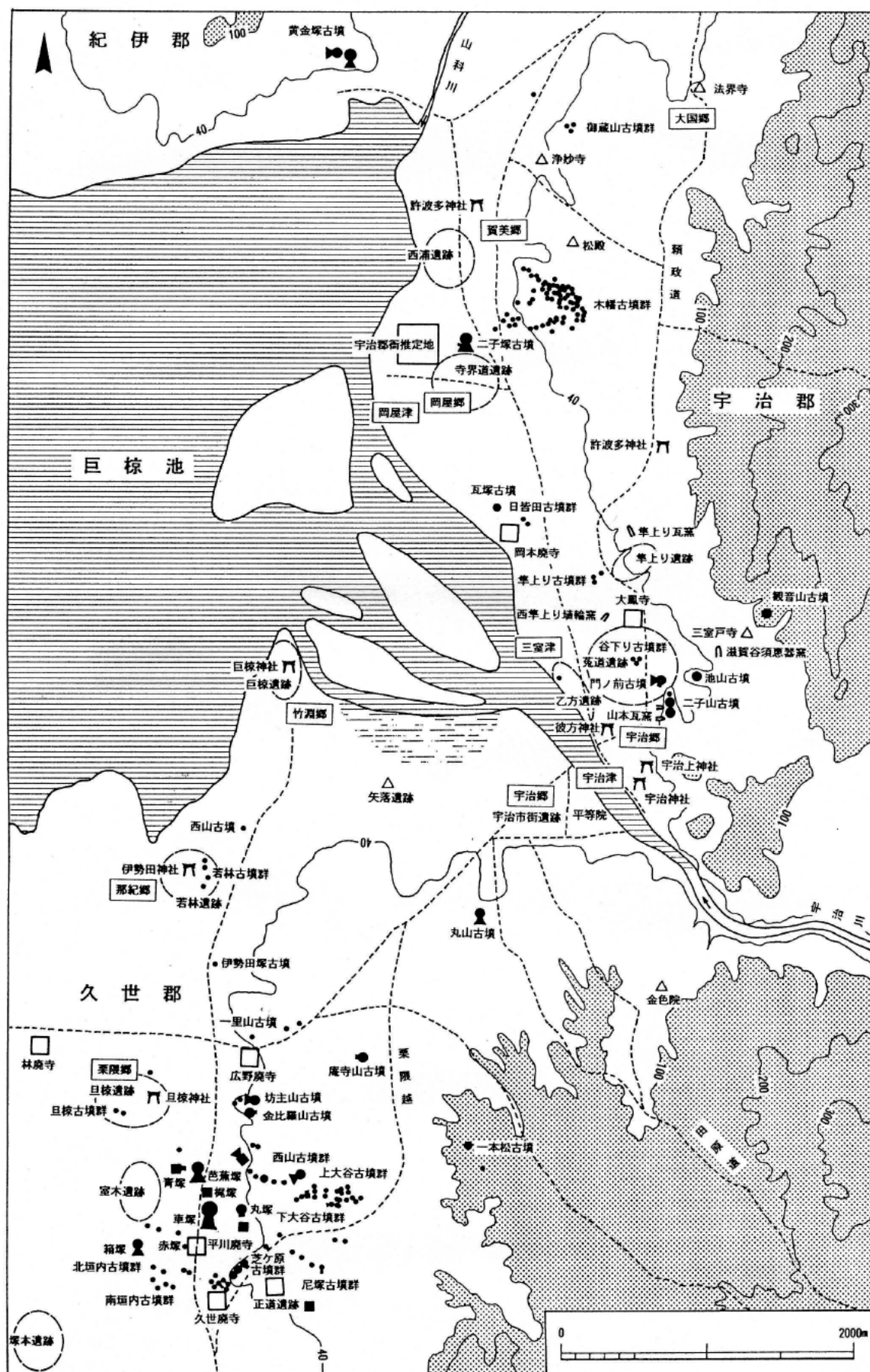
この現世の極楽浄土の具体的機能をうかがう良い資料がある。1067年の後冷泉天皇平等院行幸である。この行幸では、鳳凰堂前の池上には錦繡の仮屋が建てられ、池中には龍頭鰐首船が浮かび、天皇は池上の仮屋から阿弥陀如来を礼拝している。浄土経典は往生者が極楽の宝池に化生することを説いている。当時の観想念仏を踏まえれば、この礼拝はまさに極楽往生の疑似体験であったとしてよい。さらに注意すべきは、この行幸に報いるために平等院や藤原頼通に功賞があり、宇治川対岸にある離宮社にも位記が授けられている点である。近年、離宮社(現宇治上神社)本殿の年輪年代測定を行ったところ、1060年に建てられていることが判明した。離宮社の造営年代と平等院行幸のあり方を踏まえると、両者は対

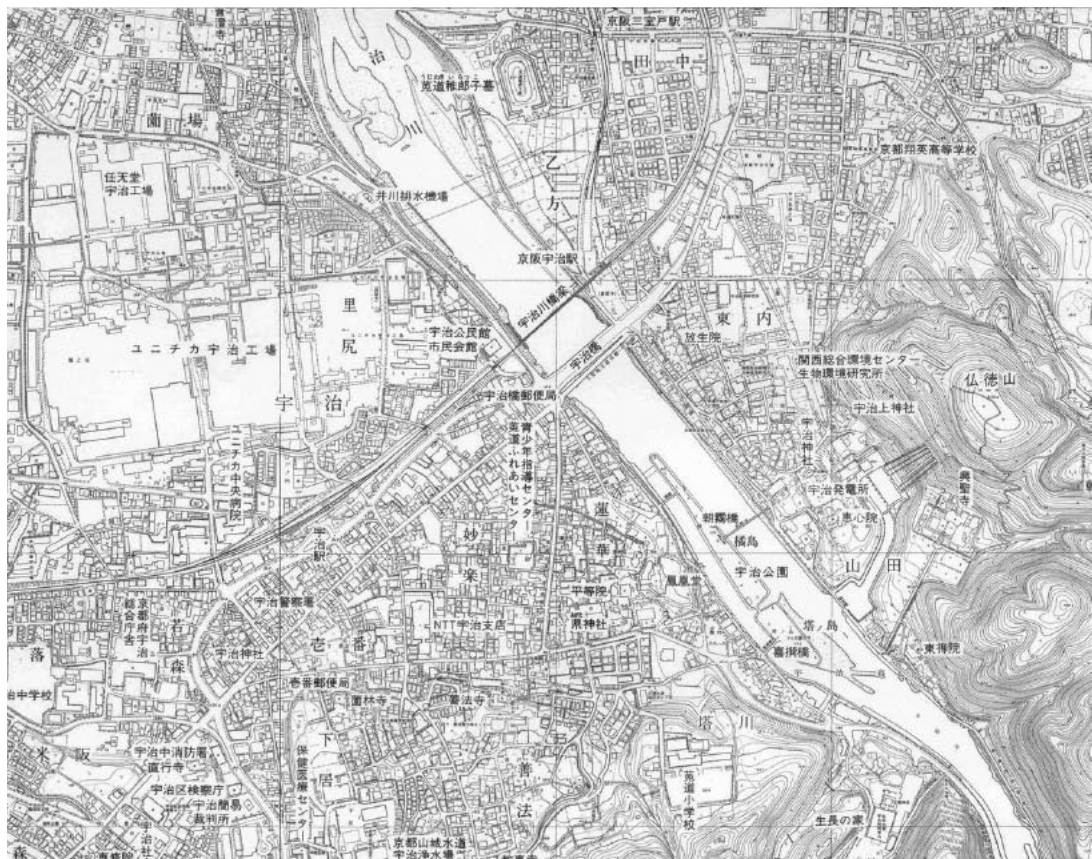
施設であったと考えられる。彼岸である平等院は、此岸の存在がなければ存在し得ない。宇治川西岸の平等院を彼岸とすべく、此岸のシンボルとして対岸に配置されたのが離宮社であり、宇治川は彼岸と此岸とを分け隔てる境界として認識されたと考えてよいだろう。平等院庭園が宇治川西岸に面し、広く景観を東に解放するのは、まさにこの点による。藤原頼通の西方浄土への憧憬は、ひとり鳳凰堂と平等院庭園に仮託されたのではなく、広く宇治の自然景観を含みこんだ中に表現されたとみるべきであろう。

頼通薨去後、鳳凰堂の池対岸に専用観覧施設小御所が建てられ、頼通の空間仮託のコンセプトに修正が迫られ、さらに12世紀初頭に鳳凰堂は建築表現を変える。ただこのような変化は、現世の極楽浄土としての平等院の提案力を弱めてはいない。それは、鳳凰堂を模した勝光明院も平泉無量光院も、改修された鳳凰堂と平等院庭園を手本としていることからうかがえよう。

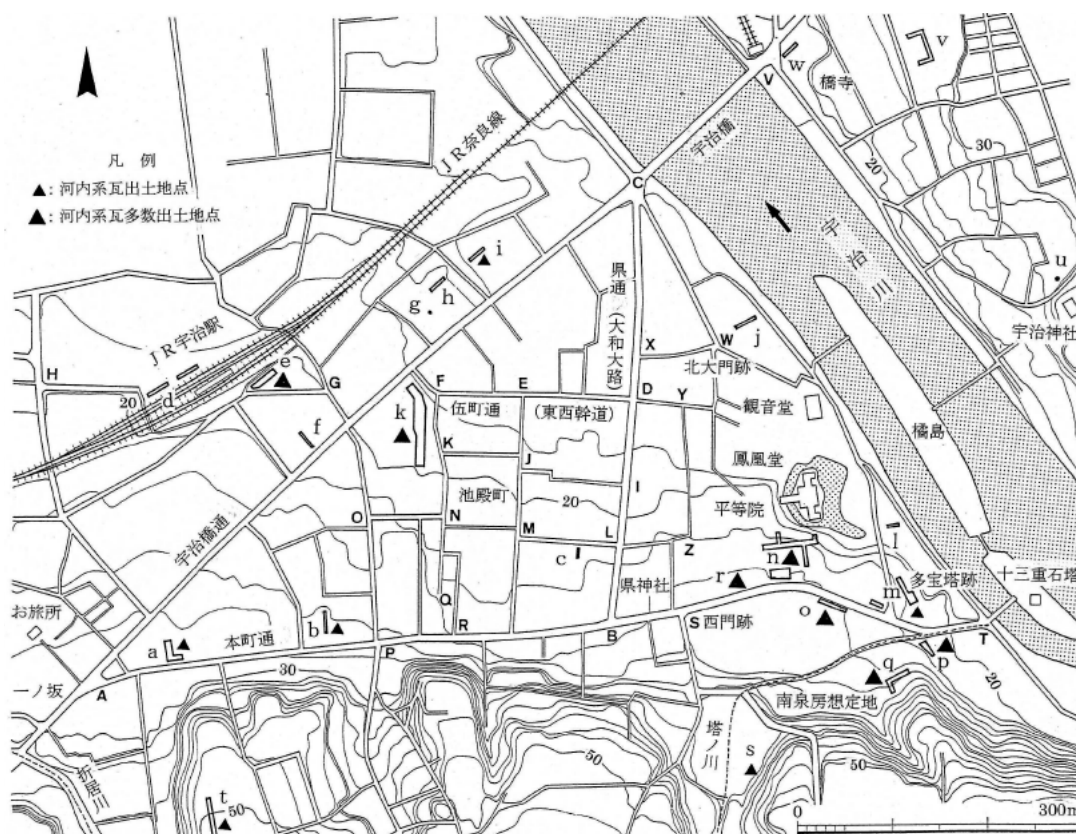
参考文献

- 1) 『史跡及び名勝平等院庭園保存整備調査報告書』宗教法人 平等院、2003年
- 2) 吹田直子・杉本宏「平等院発掘」『佛教藝術』279号 - 特集宇治の考古学・藤原氏別業の世界 - 毎日新聞社、2005年
- 3) 杉本宏『日本の遺跡6 宇治遺跡群』- 藤原氏が残した平安王朝遺跡 -、同成社、2006年





図－2 現代の宇治周辺の地形図



図－3 平等院周辺の地形と道路（1965年頃の地図から）

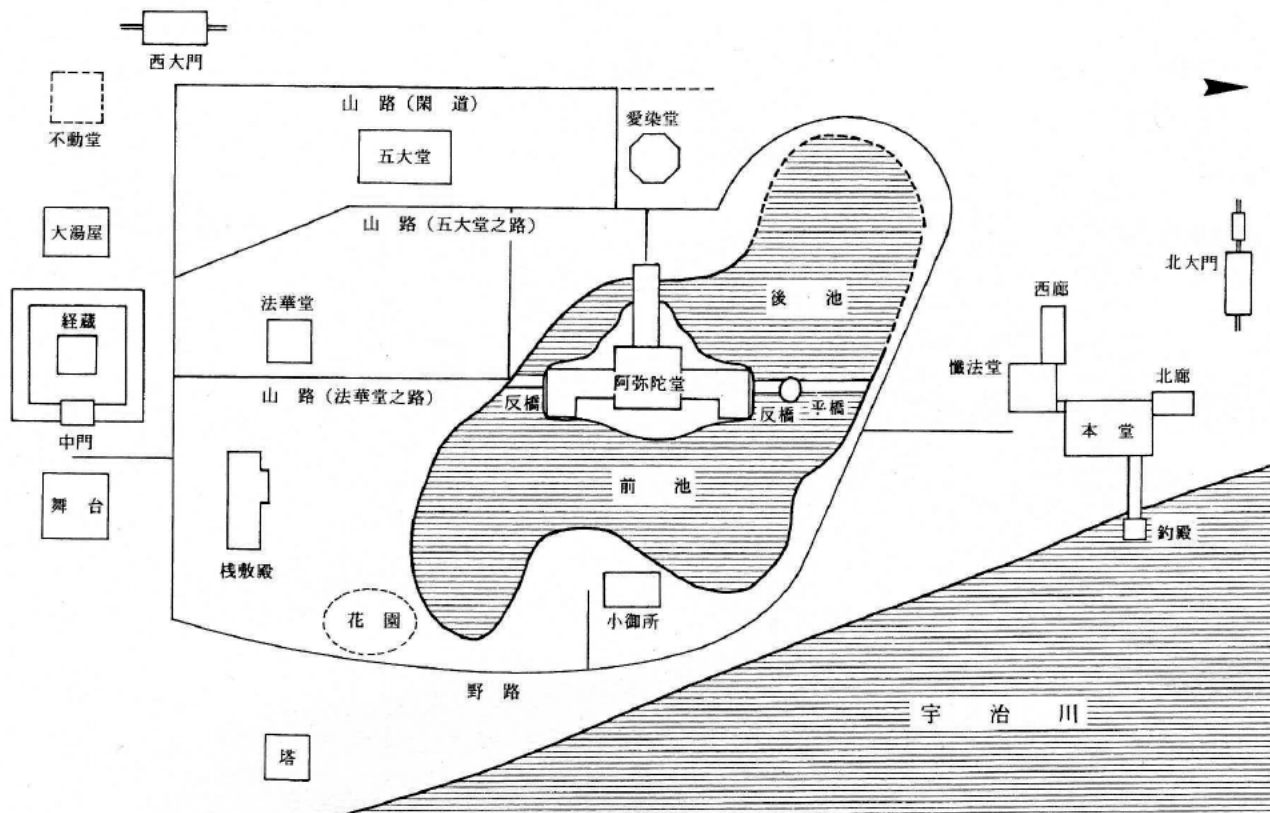


図-4 平等院伽藍の諸堂推定位置関係図

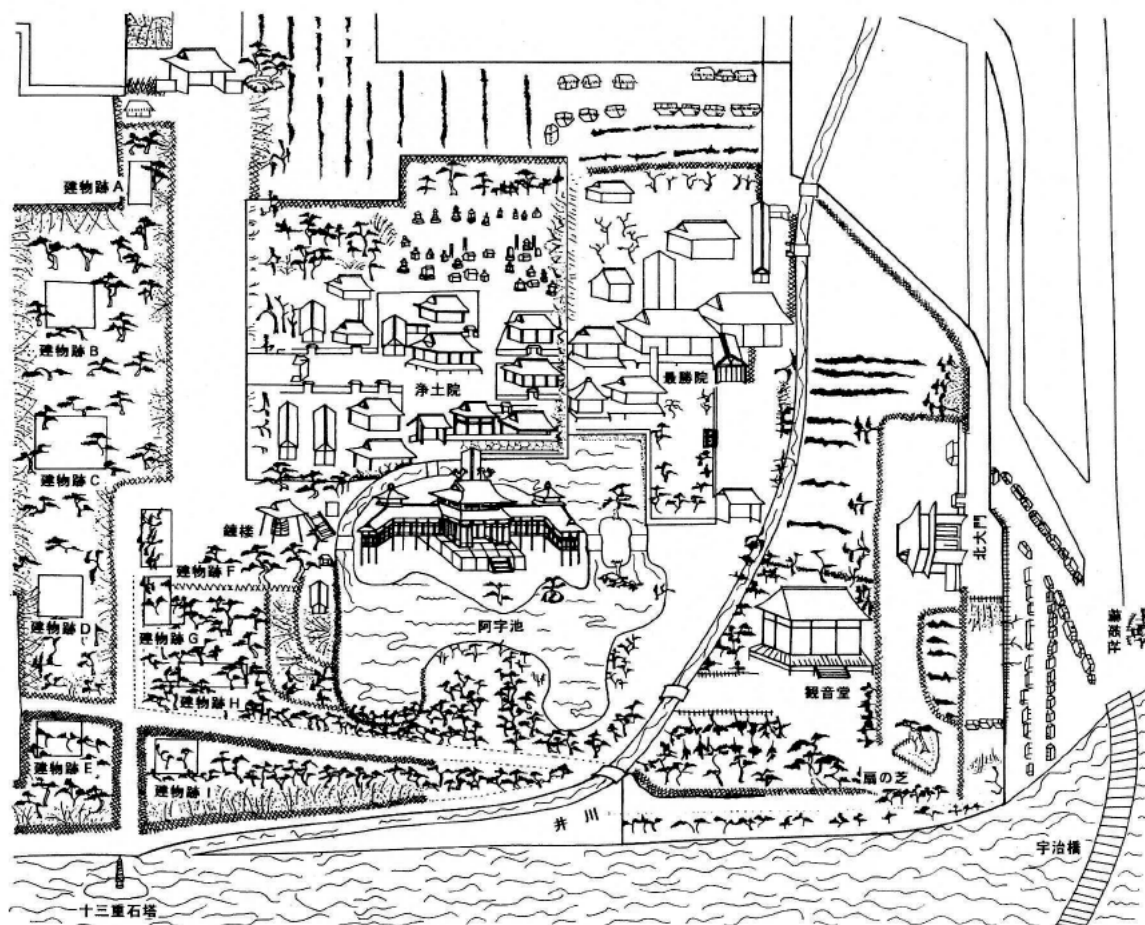


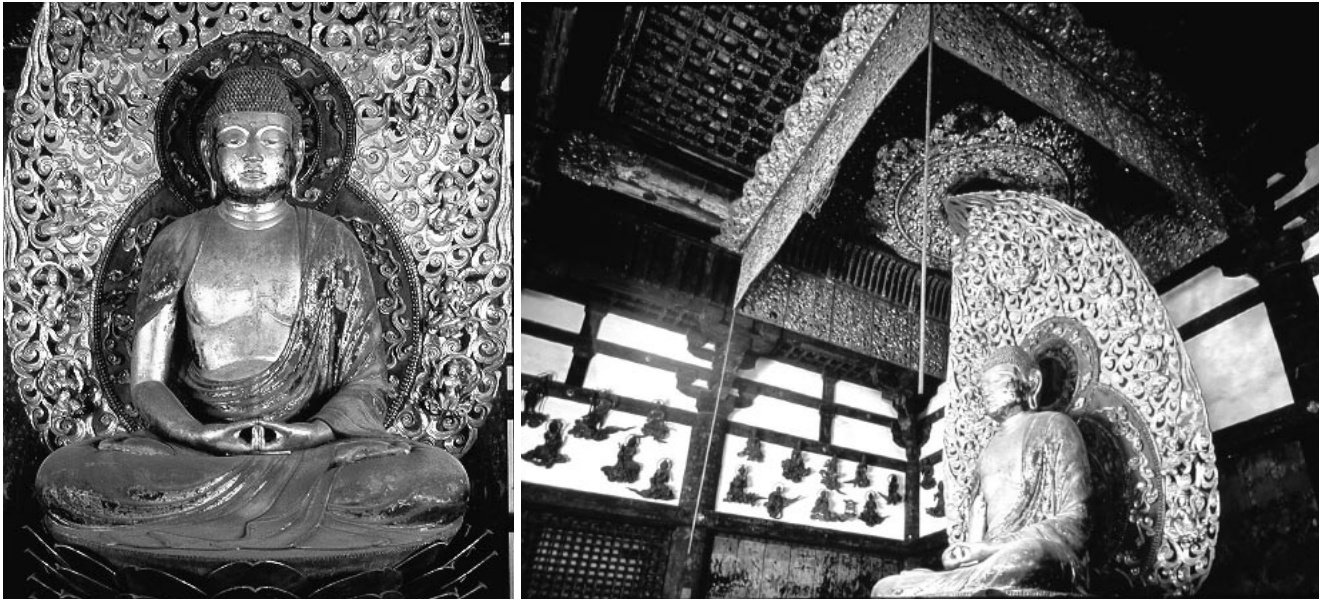
図-5 最勝院蔵「平等院境内古図乙図」(近世、書き起こし文字追加)



図－7 平等院庭園 上空写真



図－8 鳳凰堂と浄土図の各段対応関係



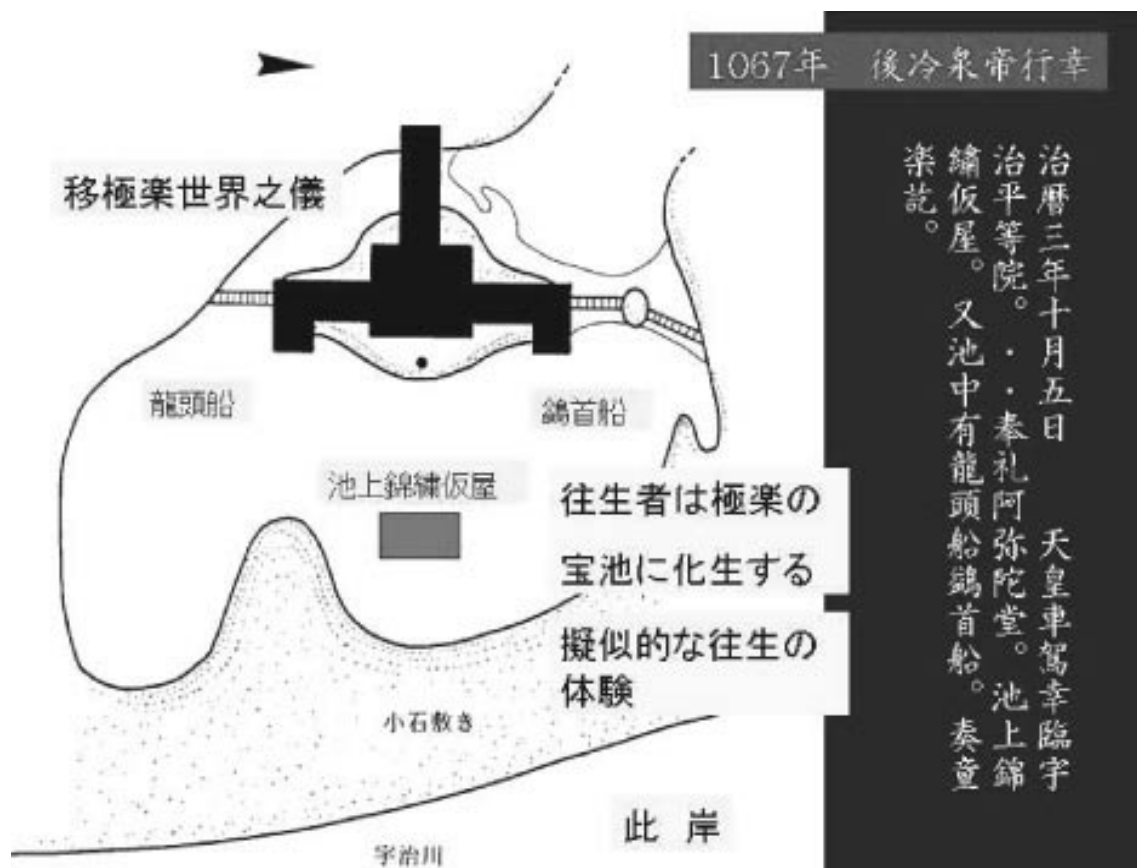
図－9 本尊 阿弥陀如来坐像（定朝作 丈六寄木造）



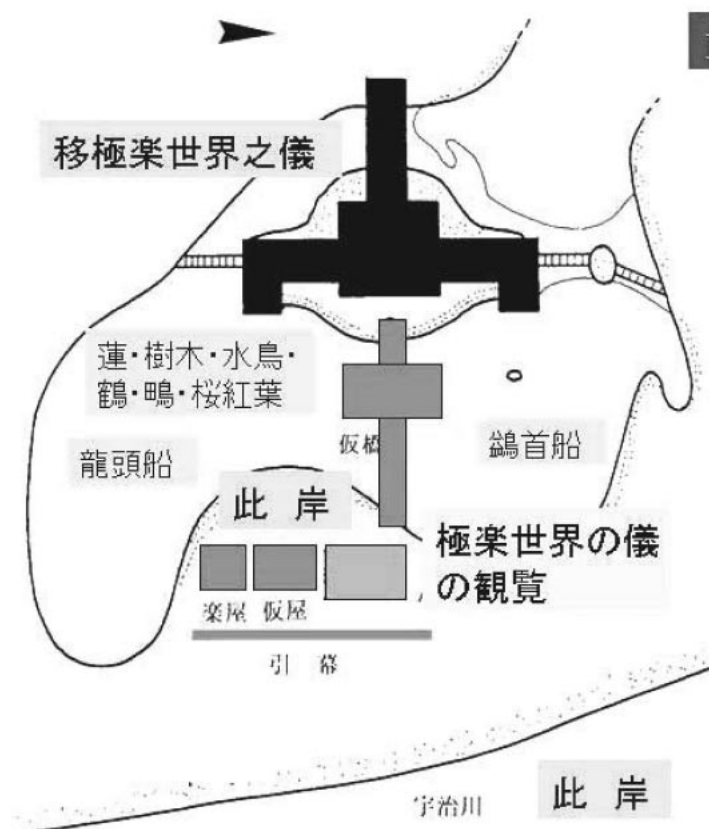
図－10 鳳凰堂仏後壁の阿弥陀



図－11 鳳凰堂周囲の庭園発掘



図－12 後冷泉行幸時（1067年）



1118年 寛子十種供養

元永元年九月二十二日。今日太后於宇治阿彌陀堂有十種供養。・前池作蓮花水鳥樹林洲鶴砂鵝作立之。或桜花。或紅葉。水中岸上已無其隙。東小御所為太后前齋院姫君御所。・其南面作四間飯屋為公卿座。・東庭引幔。其屋南立幄一字為樂屋。・出立樂屋前吹調子。經舞台前池橋。歩進堂前。・前池南北浮龍頭鷓首。・

図- 13 十種供養時 (1118 年)

「平等院者。水石幽奇。風流勝絶。前有一葦之渡長河。宛如導群類於彼岸。傍有二華之疊層嶺。不異積善而為山。是以改賓閣兮為仙家。廻心匠兮構精舍。爰造弥陀如來之像。

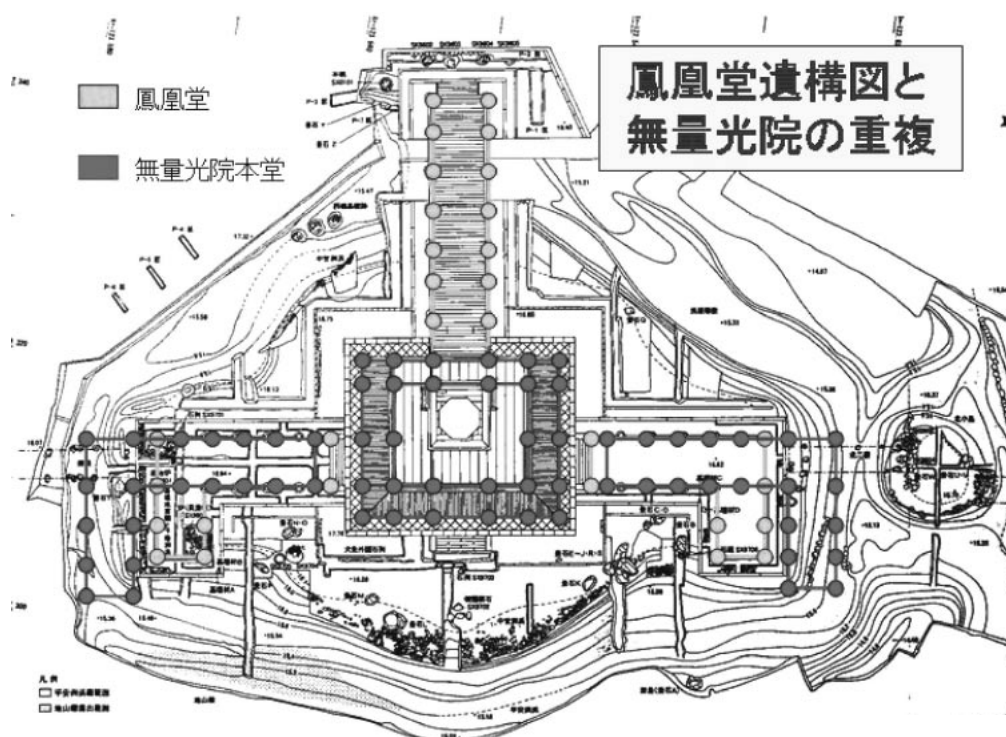
移極樂世界之儀」 『扶桑略記』康平四年(1061)



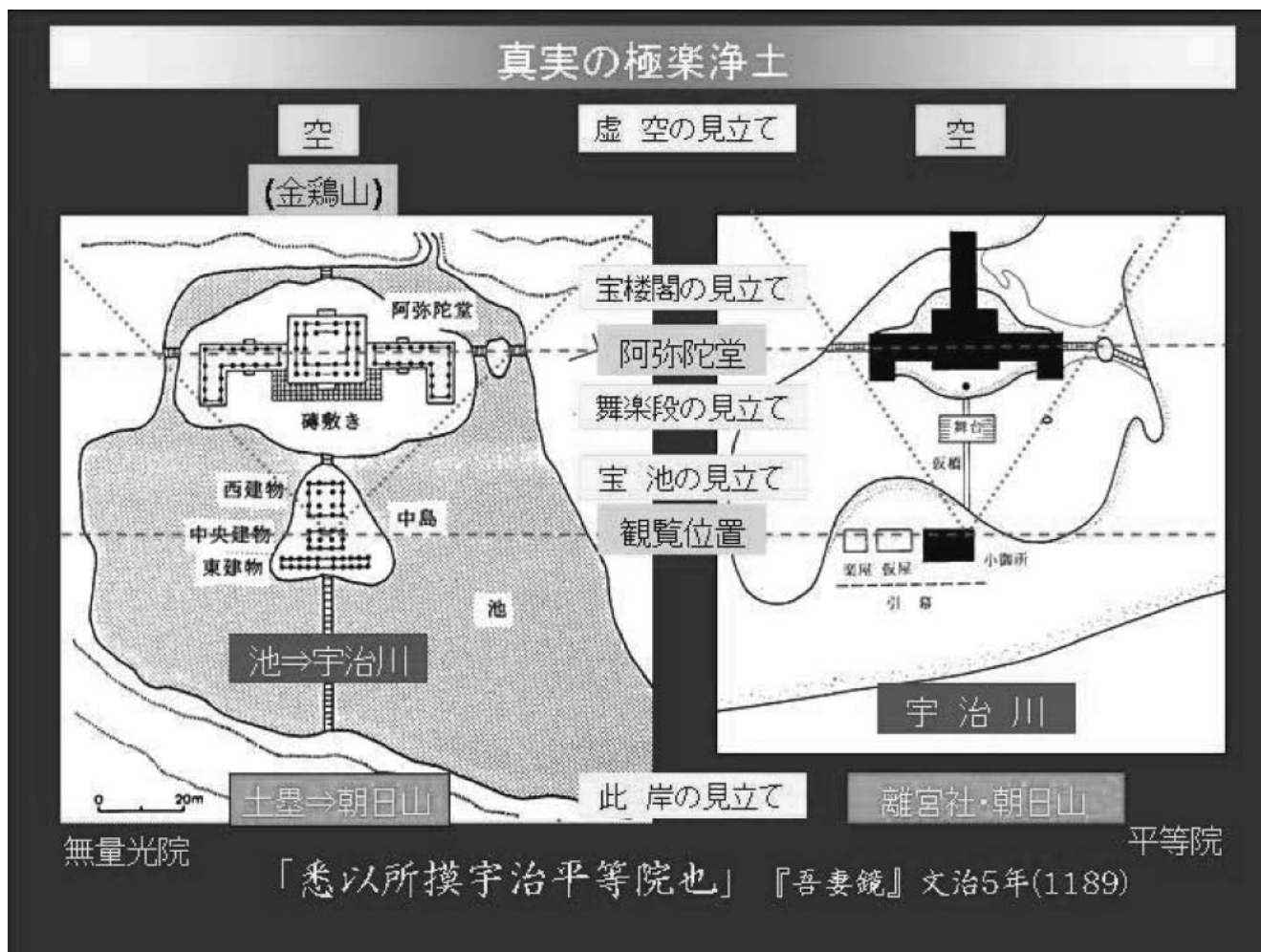
図- 14 『扶桑略記』から判読できる空間仮託



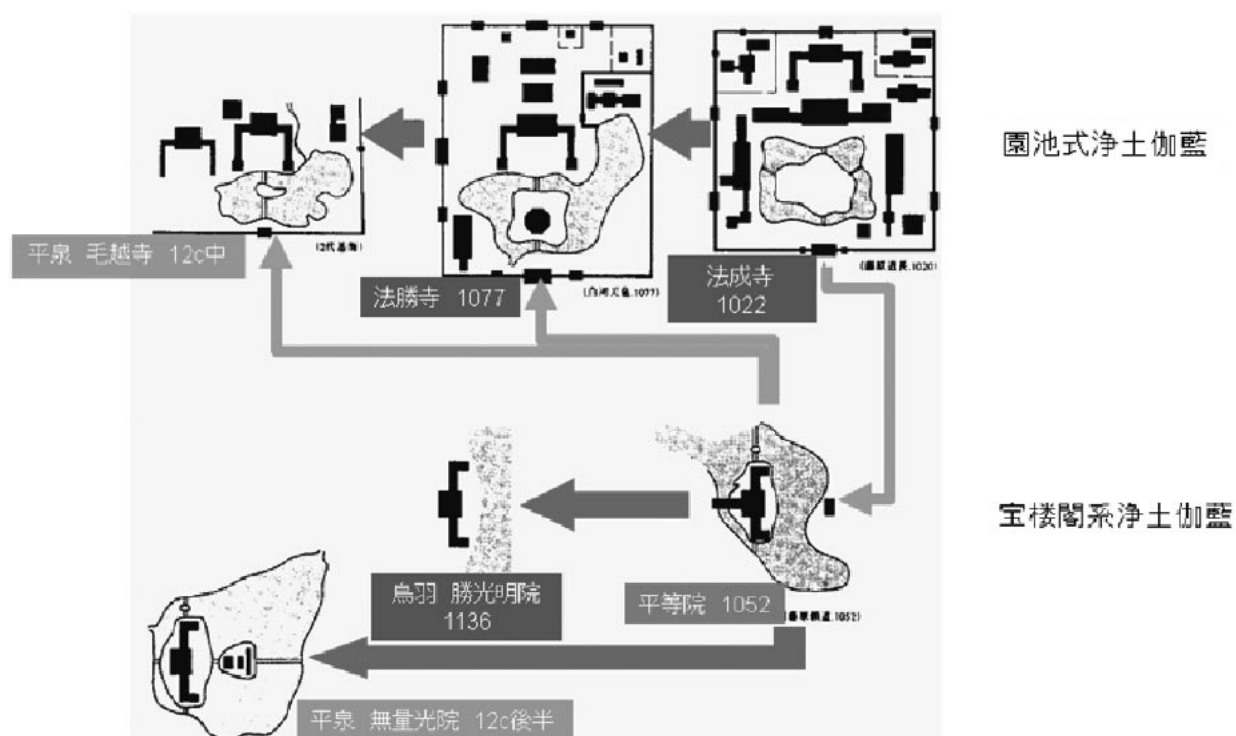
図－15 平等院の空間仮託の構造



図－16 鳳凰堂発掘図に平泉無量光院を重ねる



図－17 無量光院と鳳凰堂との法会時比較



図－18 平安期浄土教寺院の変遷